

答え合わせ・解説

問1	答え 1 大宰府	九州北部は地理的に中国大陸や朝鮮半島に近いため、古くから外交の拠点となりました。大宰府は、唐や新羅などの使節を迎え入れる外交機能と、外敵の侵入を防ぐ防衛機能の両方を兼ね備えており、都から離れた場所にある重要な行政機関という意味で「遠の朝廷」と呼ばれました。
問2	答え 2 金印によって中国との外交を行い、後に渡来人から漢字や儒教などの文化が伝えられ、律令国家の形成期に富本銭や和同開珎が作られた。	日本の古代史は、1世紀の金印授受（中国との外交）から始まり、5世紀前後の古墳時代に渡来人が大陸の技術や文化（漢字・儒教・須恵器など）を伝え、7世紀後半から8世紀にかけて律令国家としての体制を整える一環として、富本銭や和同開珎といった貨幣が鑄造されるという流れを辿ります。金印に刻まれているのは漢字であり、インダス文字ではありません。
問3	答え 3 710年に元明天皇が藤原京から奈良に遷都し、律令政治の拠点とした。	律令体制を強化し、天皇を中心とする中央集権国家を完成させるために、大規模な遷都が行われました。この時期は国際色豊かな「天平文化」が栄え、遣唐使を通じて大陸の文化が数多くもたらされたことも特徴です。
問4	答え 2 正しい戒律を伝えて僧侶の資格を厳格化し、律宗を広めて仏教界の秩序を整えるため	当時の日本では、税を逃れるために勝手に僧侶を名乗る者が増えたことが社会問題となっていました。そのため、国家は唐から高僧である鑑真を招き、正式な儀式（授戒）を経て僧侶となる仕組みを確立させました。これにより、仏教界の質と規律が向上しました。なお、天台宗は最澄、真言宗は空海、社会事業は行基に関連する内容です。
問5	答え 4 国司は中央政府から派遣された官吏で、一定の任期があった。一方、郡司はかつての有力な地方豪族が任命され、その地位は世襲されることが多かった。	律令制における地方統治は、中央から派遣される国司と、地元根付いた勢力である郡司の連携によって行われました。国司は中央の意向を反映させるために任期制（公選）とされましたが、郡司は在地支配の実情に合わせて旧来の豪族を任命し、その地位は原則として世襲されました。この仕組みを通じて、中央政府は全国に徴税や戸籍の作成といった制度を浸透させようとしていました。
問6	答え 1 九州北部に大宰府を置き、防人や水城などを配置して東アジアの情勢に対応した。	7世紀半ばの白村江の戦い以降、東アジア情勢の緊迫化を受けて九州北部に大宰府が整備され、防人や水城を設置して防衛体制が強化されました。東北地方の防衛には陸奥国に鎮守府が置かれました。
問7	答え 1 聖武天皇の遺品を納めた正倉院に見られるような、国際色豊かな貴族文化	奈良時代の聖武天皇の時期を中心に栄えた文化は天平文化と呼ばれます。この文化の最大の特徴は、唐の文化や仏教の影響を強く受けた国際的な性格にあります。その象徴として、東大寺正倉院には、シルクロードを経由してペルシャ（イラン）などから伝わった国際色豊かな工芸品が数多く収められています。
問8	答え 1 土地の私有を認めることで人々の開墾意欲を高め、不足していた田地を増やして税収を安定させるため。	当時は人口の増加により、農民に与える口分田が不足し、政府は税（租）を徴収する基盤を失いつつありました。そこで、苦勞して開墾した土地が一定期間で国に没収される仕組みを改め、永年私有を認めることで、田地を開発する動機づけを行いました。
問9	答え 2 万葉集	奈良時代の文化を代表する日本最古の和歌集です。約4500首もの歌が収録されており、その作者が天皇、貴族から防人、農民まで多岐にわたる点は、当時の文化や言葉の広まりを示す重要な特徴です。選択肢にある『古今和歌集』は平安時代、『新古今和歌集』は鎌倉時代に成立したものであり、時代背景が異なります。
問10	答え 1 唐の進んだ律令制度を学び、天皇を中心とした法に基づく中央集権的な統治体制を構築するため。	当時の日本は、天皇を頂点とした強力な国家体制を築くことを急いでいました。そのため、唐の高度な法律体系（律令）や官僚制度、租・庸・調などの税制をモデルにする必要がありました。遣唐使が持ち帰った知識は、大宝律令の完成や平城京の造営などに大きく貢献しました。
問11	答え 2 唐の長安	平城京は、元明天皇の時代の710年に、それまでの藤原京から遷都して造営されました。この都は、当時、東アジアの政治・文化の中心として栄えていた唐の都である「長安」をモデルとして設計されており、碁盤の目のように区切られた整然とした街並みが特徴です。当時の日本は遣唐使を派遣し、大陸の進んだ制度や文化を積極的に取り入れていました。
問12	答え 4 天皇による国内支配の正当性を、神話や伝承といった歴史的経緯をもとに内外に示すため。	律令制に基づいた中央集権国家の確立を目指していた当時の朝廷にとって、天皇が日本を統治する正統な理由を公式に記録することは不可欠な事業でした。そのため、バラバラに残っていた神話や有力氏族の伝承を一つの「正史」としてまとめ、国家の正当性を主張しようとしていました。なお、地方の地理や産物を記録したのは『風土記』、和歌の収集は『万葉集』の役割です。